

砂の岡と云、昔は芝浦の海の潮、此所迄入來る入江の續にて、斯三ツの岡の相續を以て、谷中の岡に三崎と云地名有、其中間に有る池の大き十二萬坪有と云傳ふ、此池東は忍の岡の岸、西南の方は向ふの岡の岸、北東は入砂の岡の岸迄にて、其頃は今の池の岸べりの民家通りの道もなしとなり、此池を不忍の池ト名付け、東の岡を忍の岡と名付けしことは、其むかし忍岡の東、今の清水村に關野喜内光耀といふものあり、其地に清水出る故に、關野氏が住居せし所なれば、近江の名を引寄て、關の清水と人呼たり、今は根岸の方にて、本阿彌某が隱居したる所に跡有と言傳ふ、忍の岡入砂の岡に對して、池の西の方を向ふの岡と呼ぶ、

〔慶長見聞集六〕江戸町の水道の事

見しは昔、江戸町の跡は今大名町になり、今の江戸町は、十二年以前までは、大海原なりしを、當君○德川の御威勢にて、南海をうめ陸地となし、町を立給ふ、然に町ゆたかにさかふるといへども、井の水へ鹽さし入、萬民是をなげくと聞召民をあはれみ給ひ、神田明神山岸の水を北東の町へながし、山王山本の流を西南の町へながし、此二水を江戸町へあまねくあたへ給ふ、

〔慶長見聞集七〕南海をうめ江戸町立給ふ事

見しは昔、當君武州豊島の郡江戸へ御打入より、このかた町繁昌す、まかれ共、地形廣からず、是に依てとしまの洲崎に町をたてんと仰有て、慶長八卯の年、日本六十餘州の人歩をよせ、神田山をひきくづし、南方の海を四方三十餘町うめさせ、陸地となし、其上に在家を立給ふ、○中此町の外家居つゝ、き廣大なる事、南は品川、西はたやすの原、北は神田の原、東は淺草まで町つゝきたり、

〔落穂集追加二〕江戸町方普請の事

一問曰、關東御入國後、町方の普請之義、何れの所より始て被仰付る、や、答曰、右長崎小木曾杯常に申は、只今の日本橋筋より、三河町川岸通りの堅堀の堀る、が初めにて、夫より段々と堅堀